

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

見習いメイド シスターズ

小説 岡下 誠

挿絵 ねみぎつかさ

プロローグ	006
第一章 紳士としての教育	021
第二章 家事禁止令	075
第三章 のぞき見のお仕置き	119
第四章 憧れのお姉さん	166
第五章 四人がかりでご奉仕する方法	210
エピローグ	251

登場人物紹介

Characters



ひめみや さおり
姫宮沙織

元お嬢様の見習いメイド。あまり笑顔を見せない静かなタイプ。ストレートの長い黒髪で、スタイルは平均的。

そうま ひなの
相馬姫奈乃

奔放な性格の見習いメイド。性の経験は豊富。セミロングの赤髪で、ふくよかなバストを持つ。

うてな はるか
宇天奈春香

天真爛漫な見習いメイド。亜麻色の髪でツインテール。幼児体型だが、性への好奇心は旺盛。

あまくさ みさえ
天草美冴

3人の見習いメイドたちの指導役。教官役に徹しているが、熟れた身体を密かに持てあましている。髪は黒く、メガネをかけている。

すぎむら ひさき
杉村尚樹

大学生。都内で一人暮らしをしている。親は地方の名士で、大きな屋敷を構えている。

眼鏡をかけた教官メイドは揶揄のこもった微笑を浮かべていた。

「申し訳ありません……。でも……。あそこがむずがって……。あひつ、あああ、あん……」
わずかな指づかいだけでも肉感的な美女は悶え啼き、美脚を引きつらせる。

「尚樹さま。女性の身体の大まかな仕組みはご理解いただけたかと思えます。今度は実技に移りたいと存じますが、いかがでしょうか？」

若い主人は心臓が激しく鼓動するのを自覚した。

「え、あの……。でも、いいの？」

この状況になってまで、つい確認をしてしまう。浴室での奉仕から流されっぱなしの尚樹だが、いくらなんでも最後の一線を越えてしまうのはまずいような気がしたのだ。

もともと、春香にしゃぶらせている男根は期待にいきり立っているが。

「姫奈乃では不足ですか？」

「そ、そ、そんなんじゃ全然ないですけど……」

「では何も問題はありません。メイドは、身も心も主人に捧げるもの。尚樹さまはご主人さまのご息でいらっしやいます。肉体を捧げてお仕えるのは当然のことですわ。それに、姫奈乃の身体も尚樹さまを求めて発情しております」

美冴は、見習いメイドの脛口を指先でそつとなぞり、肉感的な女体を焦らした。

「姫奈乃さん。あなたからも尚樹さまにお願いをなさい」

豊かな乳房も潤んだ秘唇もあらわにした扇情的な姿態で、姫奈乃はうずきを訴えるかのように腰をくねらせる。その様は、白いカチューシャを着けた小悪魔娘といった感じだ。

「ひ、尚樹さま……。姫奈乃は……。もう……。我慢できません。発情しておりますの……。んっ……。尚樹さまのペニスを……。く、ください……。んはあ……。あんっ……。」

熱い喘ぎをもらしながら男根挿入をねだる。

艶美な誘惑を受けて尚樹の理性はあつさりと吹き飛んだ。目を血走り気味にしなからうなずく。胸は期待に高鳴り、男根はびくびくと脈動した。

「う、うん。それじゃあ……。姫奈乃さん。僕に……。女性の身体を……。教えて」

「はああ……。尚樹さまが経験する……。んっ……。初めての女になれるなんて、姫奈乃は果報者です。どうか……。尚樹さまの立派なもので……。えぐってくださいませ……。」

蠱惑的な表情で年下の男を誘っている姫奈乃だが、肉体の方はペニスを渴望して相当に差し迫っている様子だ。乳首はぴんとしこり立ち、愛撫を求めてふるえている。包皮を剥かれた女芯も小さな身体を精一杯にふくらませて、少しでも刺激を取り込もうとしていた。膣口からは止めどなく蜜がしたたっている。

寝室で行われる秘密の性教育に、姫奈乃の肉感的な肢体はすっかり高ぶっていた。秘唇をいじくられ、めくり広げられ、果ては男の指先に女芯を揉みこすられる……。女肉教材として恥所を観察され、さわられているうちに倒錯した喜びが湧いてきたのだろう。

(姫奈乃さん……すごく色っぽい……。僕、もう、もう……)

妖しく艶やかな誘惑と春香の熱心な口唇奉仕によって、男性器は限界まで膨張している。「春香ちゃん、ありがとう。気持ちよかったよ」

さくらんぼを思わせる唇から男性器を引き抜くと、唾液が透明な粘液糸となって伸びた。尚樹の巨大な男根は、全体に唾液をまぶされてぬらぬらと照り輝いている。そそり立つて周囲を睥睨するとともに、女体を貪らんとしていなかった。

「ふみゅうう……」

童顔メイドは垂れがちの目をふみゅんと潤ませ、うっとりとした陶酔の表情を浮かべている。いつの間にか彼女の両手は太腿の間に挟まれていた。無意識なのだろうか、太腿同士をこすり合わせて手で股間をおさえた様は、幼女がおしっこを我慢しているかのようだ。しかし春香がこらえているのはもっと恥ずかしい欲求であろう。

「は、初めてだから……上手くできないかもしれないけれど……」

「ご安心ください。私をご指導申し上げますわ。尚樹さまはあまり気負われず、ただ姫奈乃の身体を楽しんでくださいれば結構ですから」

裸身の若主人は、姫奈乃の身体に覆い被さるようにして四つん這いの姿勢をとった。

急角度で起立した男根を女唇にあてがうべく、下腹部をのぞき込みつつ腰を下げてゆく。黒薔薇の花弁にも似たパニエの中心部。美冴の左手で割り広げられている花唇……。

慎重に狙いをつけてから男性器を繰り出した。

ぬりゅっ。

性器粘膜同士がふれ合って小さな快感の火花が散る。しかし肉花びらの内側をこすっただけだった。肉筒に手を添えてみたが、それでも上手く膣穴を探りあてることができない。

(あれっ？ ここでもないっ、ええっと……あううう)

くいくいと何度も腰をつかうが、いたずらに亀頭で女性器粘膜を摩擦するばかりだ。淫ら蜜にまみれた秘肌はぬるぬるとして心地よい反面、とてもすべりやすい。

もどかしさがつのる。焦りがつのる。

「ひああああっ、あああっ、あんっ、尚樹さまあっ。じ、じらさないてくださいいいっ」
姫奈乃は高い声で啼き悶えた。若い主人の未熟な腰づかいが意図せぬ焦らしとなったのである。発情して咲きめくれた肉花弁を踏み荒らされ、剥き身の女芯をこすり上げられ、肉感的な見習いメイドは濃密な前戯により乱れ、黒いストッキングを穿いた美脚を引きつらせた。仰向けに横たわって秘唇をあからさまにしたまま股間をくねらせる。

「ふふふ。尚樹さまったら、こんなにうずうずしている姫奈乃をまだ焦らすとは……」

美冴は眼鏡のフレームにそっと手をやりつつ、楽しいな表情であせる尚樹を見ていた。

(あうあう。焦らしじゃないですってば。見ているだけじゃなくてアドバイスを)

目での訴えかけが通じたのか、実技指導をする女教師は微笑をしながらうなずく。

「導いて差し上げますわ。失礼いたします……」

助言をしてくれるだけかと思つたが、三つ指で男性器をつままれた。

(えええええ?)

知性が薫る年上女性にペニスをさわられ、尚樹の肉体はさらに熱くなる。

(考えてみれば……こんな綺麗なお姉さんに指導されて、姫奈乃さんみたいなスタイル抜群の美女で初体験ができるなんて……僕って幸せ者かも……)

喜びにいななく男性器がわずかに引き下げられ、角度の調節が行われた。美冴の手で開陳された女唇へと導かれる。亀頭が肉のくぼみにぬめり込んでいるのがわかつた。

「そのまま腰をお進めください」

粘液にぬめ光る亀頭を膣口に突き立てる。ぬるりという感触とともに侵入を果たした。姫奈乃の膣穴は十分すぎるほどに潤っており、しかも驚くほどの熱を帯びている。ゆっくりと打ち込んでゆくと、心地よい抵抗感とともにずぶずぶと掘り進めることができた。

亀頭という肉の掘削機で、狭い女肉穴をこすり、押し広げ、最奥を目指す。

「はああ……あつ、入ってきます……ああ……はうう……」

水を得た薔薇のように姫奈乃は歡喜の表情を浮かべた。求め続けていたものをようやくにして与えられ、欲求不満の大きさがそのまま快樂の大きさへと昇華する。小悪魔を思わせる蠱惑的な美人メイドは、女陰を刺し貫かれて身体の芯から性の喜びを貪っていた。

(うわあつ、あうううううう……)

その一方、尚樹も押し寄せてくる快感を懸命にこらえていた。

しっとりとして熱い秘粘膜が一斉に絡みついてくる。やわらかな肉が密着してきて男性器全体を吸引された。奥へ誘うかのように、搾り抜かれるように、濡れ潤んだ秘肉がむしゃぶりついてくる。膣そのものが貪欲な生き物のように思えた。

熱のこもった歓待ぶりに、敏感な亀頭はびくんびくんとよがり悶える。もし浴室で射精していなかったら、挿入した瞬間に暴発していたところだ。何とか奥まで入れ終えると、両手で上半身を支えたまま一息つく。姫奈乃の恍惚とした顔を見下ろすと、この官能的で美しい女性をおのれの男性器で征服したのだという実感が湧いてきた。

「いかがですか、尚樹さま。姫奈乃のあそこの味わいは？」

「と、とつてもいいです……。油断していると、すぐに……。うくうっ」

挿入しているだけでも膣粘膜が絡みついてきて、きゆうきゆうと吸いしゃぶられる。

組み敷かれた姫奈乃は陶醉しきった顔で若い主人を見上げ、自らの太腿を抱えて仰向けに横たわった姿勢のまま腰をうねりまわした。抜き差しを催促するかのよう。

「尚樹さま……。んうう……。動いてください……。もつと姫奈乃の身体を……。はああ……楽しんでくださいませ……」

熱い喘ぎを交えながらのおねだりをされ、尚樹の理性は一瞬にして沸騰した。

早く射精してしまっただろうし、とか、感じさせられなかったらどうしよう、などという不安感は蒸気となってどこかにいつてしまう。代わってこみ上げてきたのは、組み敷いている極上の美肉を味わいつくしたいという牡の本能的な欲求だった。

たわわに実った乳房を両手でつかみしめ、荒々しく揉みしだく。吸いつくような肌と、手にあまるほどの豊かな量感、やわらかな感触を思う存分に堪能する。

「んはあっ、ひ、尚樹さまあっ、胸、そんな乱暴にされると、あああ……はあん……」

言葉とは裏腹に姫奈乃は背を反り返らせ、真紅のブラウスからこぼれ出た乳房を突き上げていた。まるで乳房を捧げているかのようなのである。悲鳴にも甘い響きが満ちていた。

尚樹は、甘い悲鳴を上げる唇に口づけする。それだけでは飽きたらず、唇を執拗に舐めまわした。しどけなく半開きになった唇に舌を差し込むと、姫奈乃の舌が絡みついてくる。舌と舌がぬめぬめとこすれ合うのが心地よく、見習いメイドの口唇内を隅々まで蹂躪した。

「んうう……ん……んっ……んはああ……はんん……んうううう……」

自分の身体の下で肉感的なメイドが喘いでいるのを見ると、情動の炎はますます燃えさかる。豊乳を揉みこねながら唇と舌を貪り吸った。

膣粘膜がもたらす愉悦にも少しだけ慣れたので、尚樹はゆつくりと腰をつかい始める。豊かな乳房を取っ手にして腰を前後させた。硬くこわばった肉柱を女陰で抜き差しする。

「はあああ……いいですっ。気持ちいいですっ。尚樹さまのちんぽおお……いいですっ」

突き入れるごとに姫奈乃は喘ぎをもらし、淫らがましくよがり悶えた。純白のカチュエーシヤを着けた頭が左右に振られる。それに合わせて濃赤色のセミロングヘアも乱れた。

(姫奈乃さん……僕のチンポで感じてくれるんだ……)

年上の美人メイドを自身のペニスでよがらせているのかと思うと、男としての自信がむくむくと湧き上がってくる。

もつと啼かせたい。もつと乱れさせたい。牡の本能がそう訴えかけてくる。

それに加えて、豪華な観客たちの視線がなおのこと尚樹の牡を駆り立てた。性の手ほどきをしてきている教官メイドは眼鏡の奥から熱い眼差しを注いでいる。伶俐で知的な美貌は元のままで、ごくかすかに興奮が見てとれるのだ。可愛らしい童顔メイドは大きな瞳をふみゆんと潤ませている。本人はこつそりしているつもりなのだろうが、太腿の間に差し込んだ手を蠢かせていた。下着越しに股間を慰めているのだ。

(二人に見せつきたい……。僕のチンポで姫奈乃さんがよがり悶えるのを……)

男女の交わりは二人きりであるものと漠然と考えていた尚樹だが、早くも見られる快感に目覚めていた。観客の存在を意識すると心も肉体も高ぶる。

腰づかいを次第に速めてゆく。絡みついてくる腔粘膜を龟头でぐいっとかき分け、狭い肉穴を一気に姦通した。奥まで届くとすぐさま引き抜き、腔粘膜をこすり上げながら一撃で貫く。腰は一定の律動を刻み、巨軀を誇るペニスで絶え間なく女体を責め立てた。

「はあつ、あんつ、あつ、ああつ、あひいつ、はんつ……」

パニエが形づくる黒薔薇の中心部に、繰り返し力強い突き込みを見舞う。

打ち込みのリズムに合わせて姫奈乃は高い嬌声を放つ。いわば男根で女肉を奏で、尚樹の望むままに啼かせているのだ。女体という楽器の演奏に彼は夢中になる。

ぐちゅ……にゅちゅ……じゅく……にちゅ……。

性器の結合部からは小さな濡れ音が響いた。

「尚樹さま。出し入れただけではなく、突き入れたままかきまわす動作も加えると、もっとよろしゅうございますわ」

「う、うんつ。こんな感じかなつ」

教官メイドの助言に従って腰を回転させる。肉棒で蜜壺を攪拌した。

「はひいいつ、あああ……か、かきまわさないでください。それをされると、私、ひああああ……あん……ひいひい……」

姫奈乃はさらに高い声でよがり啼く。小悪魔を思わせる疊惑的な美貌は、今や性の喜びに酔いしれていた。官能美に恵まれた肢体は快楽に灼かれている。発情期真っ盛りの若い牡らしい荒々しきで犯され、秘唇は喜びの涙を止めどなく流した。

女肉教材としてその身を捧げている彼女は、性経験の豊富な年上女性として余裕を持って振る舞い、年下の男の子に自信を与える心づもりであった。

初めは確かに多少の演技も交えていたのだ。大げさな喘ぎや扇情的な言動で。

しかし、すぐにその必要はなくなる。浴室での奉仕で気をやってしまった肉体には、官能の埋み火が消えずに残っていた。美冴の指にいじられ、尚樹の視線を注がれているうちに、官能の炎は大きくなる一方だ。女芯を直接に愛撫される頃には、ふしだらな痴態をさらさないために快感をこらえなければならぬまでになっていた。

男性器を突き入れられてからは、肉体に渦巻く快感に翻弄されっぱなしである。

「んはあつ、あああつ、あんつ、あんつ……。姫奈乃のあそこは……もう……あひんっ」尚樹の逸物と美冴の的確な実技指導とが相まって、姫奈乃は女としての喜びに我を忘れていた。年下の男の子を誘惑しようとしていた小悪魔メイドは、逆に彼の雄々しい腰振りと遅しいペニスに屈服させられてしまう。

牝に剥かれていいように犯され、ふしだらにより悶えているのだ。

「あらあら。姫奈乃さん、尚樹さまのペニスで牝に堕ちてしまったようね」

眼鏡をかけた知的メイドは、歓喜に懊悩している姫奈乃の耳元にそつとささやいた。

「あんなに大きなペニスを知ってしまったら、もう普通の殿方では満足できなくなるわ」美冴は見習いメイドの女芯に指を這わせ、淫靡な指づかいで揉みこねる。男根の突き込みに加えて、感じやすい蕾までも集中的に責められ、姫奈乃は高い嬌声を上げた。

（そ、そんなに僕のチンポってすごいのかな……？）

知的な年上女性に男の象徴を褒められ、牡としての自尊心を心地よくくすぐられる。

荒ぶる性衝動と勢いにまかせて男性器を繰り出した。小悪魔ちつくなお姉さんメイドを感じさせ、悶えさせていることに血がたぎる。こわばりきった男根で女唇を荒々しくえぐり上げた。獣のような腰づかいで姫奈乃を責める。

尚樹の身体の下では肉感的な肢体がよがり悶えていた。蜜壺をかきまわしてやり、あるいは蜜汁が飛び散るほどに荒々しく抜き差し、男根の威力で性的快感を強いる。

「ひあつ。あつ、あああつ……あんつ、ああああ………」

絶え絶えの嬌声をもらしながら、真紅のメイド服をまとった美女は身をよじらせている。黒薔薇のように広がったパニエ。黒レースのガードターベルト。美脚に薔薇の模様が入った黒いストッキング。年下の初^{うぶ}な主人を誘惑するためのものだが、今はすっかり彼の虜になつてしまった。若い主人の男性器で秘唇を貫かれ、かきまわされ、官能美に恵まれた肢体には快楽が激しく渦を巻いている。

「ひああ、ああつ、尚樹さまあ……。んはあ……。はああん……。んはつ、あひあああ……。長く尾を引く嬌声を放ちながら、姫奈乃は歓喜の頂へと昇りつめる。背を反り返らせ、自らの手で抱えた美脚を細かにふるわせながら。大人の色香を漂わせる華麗な女性は、初めて性を体験した若主人に責められて氣をやつてしまったのだ。

「うぐううつ……。うつ、で、出る、出ちゃうう………」



ここは屋敷の寢室。

広いベッドの上では、尚樹に服従を誓ったメイドたちが肉体を捧げる準備をしていた。「ご主人さま……。姫奈乃の身体、心ゆくまでお楽しみください」

真紅の衣装をまとった姫奈乃は、ブラウスの胸元をはだけて豊かな乳房をさらけ出す。豊乳に絡みついて黒いブラジャーは、アンダーバストしか覆わないタイプのもので、ぷっくりとふくれた乳首があらわになっていた。挑発的なまでに張り出した乳房をさらに上腕で挟み込み、谷間を強調しながら蠱惑的な微笑で主人を誘惑する。

ほとんど股下丈のスカートの下に穿いているのは黒いガーターベルトとパニエだけで、下穿きは着けていない。どんな時にでも秘唇を捧げられるように、また、そこが主人のものであることを示すために、何も穿かずにいるのだ。

「ご主人さまあ、春香もお、いっぱいご奉仕しますから、あそこにご褒美ください」舌足らずな幼声とともに、亜麻色ツインテールの童顔メイドが身をすり寄せてくる。

ひらひらとしたフリルを多用したエプロンとメイド服は、幼い容貌の彼女にはよく似合っていた。春香は、フリルの裾飾りがついたスカートに手を差し入れて、黒いパンティーストッキングと白い下着を一緒に膝まで脱ぎ下ろす。

もつと色っぽい下着を穿きたいと春香は望んだが美冴が許さなかった。産毛すら生える兆しのないつるつるの秘唇には、飾り気のない白のコットンショーツが一番ふさわしい。

「ご、ご主人さま……。どうか沙織の身体も……お召し上がりください……」
はにかみで清楚な美貌を赤らめながら、沙織も尚樹の腕に頬を寄せてくる。

元お嬢さまという経歴を持つ沙織だが、美冴から徹底的にメイド教育を施された結果、今ではすっかり尚樹専属のメイドとなっていた。いや、お嬢さまとしての気品や淑やかさを残したまま、夜ごとの肉体奉仕を通してメイドとしての服従心を教え込まれたのだ。

足首まで届くロングスカートと、ドレスのように優美な純白のロングエプロン。肌の露出が少ない服装でありながら、その内側に秘めた女体は尚樹の男性器を求めて慢性的に発情している。紺のロングスカートの中で、しきりと太腿同士をこすり合わせていた。

（こ、こんなに可愛いメイドさんたちが、三人とも僕のものだなんて……。ああつ、両手に花どころか、花に埋もれてるって感じだよぉ〜）

「三人とも、ご主人さまのペニスにご挨拶なさい」

美冴の命令に、姫奈乃が真っ先に応える。

「承知いたしました。ふふふ……。ご主人さま、姫奈乃は胸でご挨拶いたしますわ……」

小悪魔のような蠱惑的な微笑を浮かべながら姫奈乃は自らの豊乳を両手ですくい上げた。たわわに実った二つ果実で男性器を挟み込み、太い肉脰をしごき上げる。

「わ、私も……。乳房でご奉仕させていただきます……」

令嬢メイドはエプロンの肩紐をずり下ろし、ブラウスの胸元を左右にはだけた。

彼女が身につけている白いブラジャーはフロントホックで、ホックをはずすと、綺麗な腕型をした乳房がぶるるとこぼれ出る。美冴や姫奈乃のものにくらべれば小ぶりだが、手のひらにはあまるほどの大ききで、十分に女性らしいふくらみである。沙織は清楚な顔を桜色に染めながら美乳をさりげなく両手で寄せ上げ、そそり立つ男柱へと押しつけた。主人の男性器を挟んで姫奈乃の豊乳と沙織の美乳がぶつかり合い、むにとひしゃげる。「あううう……」

たつぷりとしてやわらかな豊乳と、吸いつくようにしつとりとした美乳。二人の美人メイドから乳房を捧げられる。それぞれに味わいの異なるふくらみに左右から挟み込まれて尚樹は歓喜の呻きをもらした。やわらかな肉に埋もれた男根はびくびくと跳ねる。

「沙織さんの乳房、とっても綺麗ね。羨ましいわ……」

「ひ、姫奈乃さんこそ……。こんなに大きいんですもの。羨ましいです……」

真紅の小悪魔メイドと麗しの令嬢メイドは、這いつくばった姿勢で主人を見上げた。

「ふふふ。一緒にご奉仕しましょう。ご主人さまのペニスに……」

姫奈乃と沙織は、お互いに相手の乳房に手を添えた。小悪魔メイドはお嬢さまの美乳を、令嬢メイドは肉感美女の豊乳を、それぞれにねつとりと揉みしだく。相手の乳房を愛撫するとともに、愛しいご主人さまの男性器をしごき上げる。

むにむに……ふににに……むにゅ、もにゅにゅ……ふにぶににに……。

どこまでもやわらかな豊乳と、しつとりとした美乳が、押し合いへし合いしてひしゃげた。ぴんぴんに尖った乳首同士がこすれると、心地よい刺激が火花となって弾ける。

「んん……ああ……あつ、あんっ……。ご主人さまのペニス……熱い……逞しい……」

「胸が……あひつ、気持ちいいです……。ああっ？　ち、乳首、つままないでえっ……」
主人に乳房を捧げて挨拶しながら、姫奈乃と沙織はよがり悶えていた。

しかし、二人の見習いメイドが感じている以上の快楽に、尚樹は喘ぎをもらしてしまふ。
「ああっ、あうう、挨拶つて、そんな……うううう……」

四つのふくらみがむにむにとこすれ合っているその中心に、反り返った男根がわななっている。やわやわとマッサージをされて、亀頭の割れ口からは喜びの涎が垂れていた。

「ふににいく。ご主人さまの先っぽ、すっごく可愛いですう。いったただっきまうす」

こぼれんばかりの笑みを幼顔に浮かべて男性器に唇を寄せる。舌をれろんと伸ばし亀頭に絡めた。張り出した傘の裏側を撫でこすられ、主人の分身はびくんと跳ねる。

「んふう……おいしい……。ご主人さまのおちんぽ、おいしいですう……んううう……」

ツインテールの童顔メイドは、幼顔をうっとりさせながら亀頭の割れ口にむしゃぶりとつく。仔猫がミルクを舐めるような唾液音をさせながら、男性の象徴を舐めしゃぶった。

ちゅぷっ……にちゅるる……ずちゅる……ちゅちゅ……にちゅる……

「あううううう。さ、三人がかりだなんて……。うう……ああああ……」



裸身の若主人は立て膝の姿勢で歓喜の呻きをもらした。見習いメイドたち三人が、餓えた牝獣のように男性器へ群がっている。姫奈乃の豊潤な乳房にしごき上げられ、沙織の練乳を思わせる乳肌にこすられ、さくらんぼのような春香の唇に亀頭を舐めしゃぶられ。

三つの快楽が一挙に流れ込んで、喜びに悶えたペニスのはびくんびくんと脈動した。

「三人がかりではありませんわ。この私も……」

眼鏡をかけた教官メイドは尚樹の背後にまわり、腰に両腕を巻きつける。知的な美貌を主人の尻に寄せ、ためらうことなく割れ目へとうずめた。

「はうううっ！ーみ、美冴さんっ、そこは……あああっ、うっ、ううう……」

肛門をしゃぶられて舌を差し込まれる。不浄の排泄器官から快感が噴き上がってきた。快楽は男性器の根本にまで響き、亀頭の鈴割れからは先汁がびゆるびゆるともれ出してしまふ。肉体的な愉悦だけでなく、憧れのお姉さんを芯まで征服したのだということが実感できて、尚樹は男としての深い満足感を味わっていた。

下半身の敏感な部分へ四人がかりで奉仕され、若主人の男性器は天に向けてそびえ立つ太い円柱と化している。熱く血が沸き返り、今にも快感が暴走してしまいうさうだ。

うやうやしい手つきで主人の睾丸を転がしながら、美冴は三人に命じる。

「ご主人さまがお待ちかねよ。お尻を並べなさい」

見習いメイドたちは喜々とした顔つきで四つん這いになり、尻を主人へと捧げた。

「あひつ、あんつ、あああつ……。ひつ、ひあつ、ひいひいひいひい」

お嬢さまの乗馬は、並足からギャロップへと移行していた。雪白の美尻が股間に叩きつけられる。それにともなつて激しい快感が噴き上がった。尚樹にも、沙織にも。

「沙織さん、交替よ」

気をやる寸前の令嬢メイドに、美冴は容赦なくお預けを命じる。

教官メイドの指示に従い、三人の見習いメイドは交替で主人の腰にまたがった。

（あうつ、ああつ……。ぼ、僕、三人のメイドさんに輪姦されちゃってるよおつ）

次々と打ち寄せてくる快樂の津波。尚樹は意識ごと溺れかかっている。

しかし先に悲鳴を上げたのは三人の見習いメイドたちだった。ご主人さまの象徴を貪っているうちに、自分たちの方が性悦の炎に灼かれてしまったのだ。淫蕩な小悪魔も、天真爛漫な美少女も、清らかな令嬢も、一人また一人と、尚樹の男根に貫かれて気をやらされ、歡喜に満ちたよがり声を上げながら脱力して腰を抜かしたのである。

「さすがはご主人さま。遅しくていらつしゃいますわ」

美冴に褒められた男性器は、欲望を遂げられないまま疲労していた。肉欲のわだかまりが溜まってぎんぎんに勃起しているも、過度の摩擦で肉胴がヒリヒリとしている。

「あなたたち、情けないわね。三人がかりでこの体ていたらくなの？」

教官メイドは、歡喜の余韻に浸っている見習いメイドたちを叱責した。

「この私がお手本を見せてあげるわ。ご主人さまの身体をつかって」

(ええええええ。そ、そんな、もうバテバテなんですから……)

主人の心の叫びは、またしてもあつさりと却下された。美冴は尚樹の身体の下から抜け出すと、スカートをまくり上げ、剃毛された女陰を見せつけながら立ちほだかる。

「ちょ、ちよつと待った。僕、もう限界……。少し休ませてよ……」

「ご主人さま。見習いメイドたちにはご褒美をお与えになったのに、この私にくださらないなどということは……まさかないですわよね」

静かで穏やかな口調ながら美冴の言葉は危険な響きを帯びていた。眼鏡の奥にある瞳も半眼で、冷やかな知性と発情期の牝が宿っている。

「えつと……それは……」

教官メイドが放つ危険な香りに、三人の見習いメイドたちも気づいた。主人の意向よりも美冴の牝欲にゆだねる。仰向けに横たわる尚樹の下に姫奈乃がもぐり込み、黒いストッキングを穿いた美脚を腰に絡みつかせた。肉の拘束椅子となつて主人を捕まえる。

「ご主人さま。美冴さまは、今夜まだ一度も気をやっていますせんわ。忠実なメイドではなく、発情した牝獣です。逆らつては危のうございますわ」

小悪魔メイドは尚樹にささやきかける。豊潤な乳房の谷間に主人の頭をすっぽりと収め、左右の手で揉み込むことによつて豊乳マッサージを施しながら。

(ほふうううっ。こ、今度は姫奈乃さんが肉のマッサージチェア……)

春香と沙織も拘束に協力する。それぞれに主人の手を取って、太腿と太腿の間に挟み込む。主人の腕を押さえつけるとともに、腰をうねらせて手のひらに股間をすりつけた。主人の手のひらで自慰をして、指姦をおねだりしているのだ。

「ごっ主人さまぁー。春香のお股で、むにむにの手枷ですうー」

「ご……ご無礼を申し上げます……」

(あううっ。文字通り、両手に花……)

ぶにぶにとした春香の肉饅頭は、こすればこするほどたつぷりの肉汁が出てくる。柔毛がそよぐ沙織の姫唇は、指を突き入れてやると嬉しそうに吸いついてきた。最高

最高の拘束女体に囚われた尚樹が凝視しているものは、憧れのお姉さんの艶姿である。

「私は正式採用のメイドですから、ご褒美はそれなりの量と回数を頂戴いたします」

頭上で結い上げた髪や目元を飾る眼鏡など、美冴は知的な容貌をしていた。それでいながら、紺のブラウスをはだけ、純白のエプロンを中央に寄せて、搾れば乳が出そうなほどの豊乳をあらわにしている。怜悧な顔と肉感的な身体との対比が男の興奮を誘った。

しかも、股間には一本の産毛すら生えておらず、欲情に喘ぐ女陰が完全に剥き出しとなっている。童女のような無毛であるにもかかわらず、女性器自体は成熟した大人の姿。肉厚の女陰門の間からは紅色の花びらがはみ出ており、膣口からは熱い牝汁をもらしていた。

美冴はスカートを持ち上げたまま股間を前へとせり出させ、剃毛刑を受けた女唇を主人の視線に捧げている。主人の手で無毛に剥かれた秘唇を誇らかな表情で見せびらかした。

「私の心も身体も、全てご主人さまのものですわ。そのことを思い知らせて差し上げます。ご主人さまの肉体に……。ご主人さまのペニスに……」

眼鏡の奥にある瞳を牝の媚情にぬめらせ、美冴がまたがってくる。

咲き誇った肉花びらが亀頭に絡みつき、淫蜜の涎をいっぱいにしたらせた膣口でくわえ込む。牝欲に満ちた眼差しで主人を見ながら美冴は肉感的な尻を落とした。

ぬぶりっ。

欲望を煮えたぎらせた熱い女陰口に、男性器の根本まで一気に飲み込まれる。

「あああああ……」

眼鏡をかけた教官メイドは、顎を跳ね上げて歓喜の声を放った。

見習いメイドたちが主人に犯されているのを見ている間、美冴の女陰は欲求不満にうずき返っていた。羨ましさのあまりに、蜜汁の涙を流して。

「んはあ……。美冴のあそこ……。ご主人さまにふさがれて……。喜んでおります……」

今、待ちこがれていたものを膣穴に得て、肉感的な肢体には歓喜が渦巻いていた。

（うひうううっ。す、吸い込まれるう。美冴さんのあそこ……。す、すすぎるう……）

裸の若主人も快感に身をわななかせている。

牝となった二十六歳の膺粘膜は、男性器にびったりと吸いついてきた。亀頭の傘の裏にまで、ねっとりとしなだれかかる。主人の精を全て吸飲しつくそうとするかのように、どこまでも食欲かつ限りなく甘美な喰い締めでしゃぶりついてきた。

くわえ込まれただけで、ペニスが溶けてしまいそうなほどの快感を味わわれる。
(こ、これで腰をつかわれたら、僕、どうなっちゃうんだろう……)

美しいメイドさんたちの肉体にうずもれた主人は歓喜の予感におののいた。

背中に密着した姫奈乃は、美脚を主人の腰に絡めたまま、股間をうねりまわして女陰をすりつける。豊乳も彼女自身の手で挟むように揉みこね、尚樹の両頬を愛しんでいる。

「んっ、あん……。くらべてくださいませ……。姫奈乃の乳房と美冴さまの乳房を……」
やや汗ばんでしっとり感を帯びた肉枕は、その頂にある紅色の蕾をつんと尖らせている。
「ご主人さまあ、もつとお、もつとお、春香のあそこをかきまわしてくださいですう」

我慢できなくなった童顔メイドは、亜麻色のツイントールが跳ねるほどの勢いで腰を上げ下げし、天然無毛の幼女唇でご主人さまの指をしゃぶっていた。

「ふ、ふしだらな沙織を……はああ……お、お許しください……あんっ……ああ……」
自らの美乳に手をやって乳首をしごきながら、沙織は小刻みにくいくいと腰を前後させている。ロングスカートに隠れて見えないが、主人の手に陰核をすりつけているのだ。

美冴は、三人の痴態になおのこと煽られ、牝に餓えた牝獣さながらに腰をうねらせた。

単なる上下運動だけではなく、くわえ込んだまま尻肉を揺すりまわしたり、小刻みな抜き差しを加えたりして、多彩な腰づかいで主人を翻弄する。美尻をうねらせるたびに、豊麗な乳房が揺れ弾んだ。濡れ爛れた果肉は、ぐちゅぐちゅという粘ついた汁音を響かせる。「あああ……ご主人さまのペニス、おいしい……。んはあ……あんっ……ああん……」

すっかり牝に剥かれた女体は男根に貫かれて快感に悶えていた。乳首も女芯もうずきにぶつくりとふくれ上がり、打ち込みの衝撃を受けるごとに喜びを噴き出す。しとどに潤んだ膣口は、太く硬いものを吸いしごいて主人を喜ばせるとともに、自身もはしたなく快楽を堪能していた。主人のペニスに奉仕しているはずが、見習いメイドたちと同じように、いつの間にか主人の象徴に耽溺してしまったのだ。

(あううつ、ああっ、あっ……。そ、そんなに腰、ふらないでええっ)

熟れた教官メイドに犯されて尚樹は為す術なくよがり悶えている。淫奔な腰づかいに責め立てられて、男性器は途切れることなく快楽を与えられ続けていた。美冴の蜜壺は、それ自体が淫らな意思を持った生き物であるかのようだ。しゃぶられ、吸いつくされる。

ずぬ、ずぬ、ずぬぬっ……。ぬぶ、ぬぶ、ぬじゅゆ……。ずん、ずん、ぬじゆる……。

先ほどまではバテ気味だった尚樹だが、美冴の女肉奉仕を受けているうちに身体の芯から欲望が湧き上がってくる。自ら腰を突き上げた。初めは教官メイドの腰振りに合わせて。しかし次第に、おのれの欲望が命じるままに男性器を突き上げ始める。

「ああああつ、あ、ああ、ご主人さまっ、ご主人さま……。あんっ、んあああ……」

無毛の熟れ果実を逞しい肉柱でえぐり上げ、知性と官能美が薫る教官メイドをよがり啼かせた。憧れのお姉さんの嬌声が尚樹をますます高ぶらせる。

こみ上げてくる淫欲にまかせて、手のひらにのっている女尻をまさぐった。春香の小ぶりの尻と沙織のしっとりとした美尻。中指で肛門を突き上げ、親指を女陰に打ち込む。二本の指を同時に抜き差しし、かきまわし、二人の感じやすい二穴を指姦した。

「にうううっ、りよ、両方なんて、春香、はるかああ……。ふにやああああああ……」

喉元をさらして歓喜の声を上げ、幼児体型をびくびくんと痙攣させる。無毛の肉饅頭は激しい収縮で主人の親指を喰い締めるとともに、尿口から透明の液体をほとばしらせた。ぴしゅっ、ぴしゅっ……。ぴしゅゅゅゅゅゅ……。

「ひああああ……。沙織は、沙織はああ、ご主人さまの指で、あんっ、あああんっ……。麗しき令嬢メイドは、流麗な黒髪を振り乱してよがり悶えた。カチューシャがずれるほどに。雷光のような快感に全身を打たれて、澄んだ嬌声を放ちながら氣をやった。

尚樹は、頬を挟み込んでいる豊饒の乳房の片方に顔面をうずめる。ぷっくりと尖り立った乳首にむしゃぶりつき、猛烈な勢いでちゅうちゅうと吸引した。

「ご主人さまあ、す、吸わないで……。お乳が、お乳があ……。あああ、ひっ、あああ……。豊かな乳房を誇る小悪魔メイドは、いきなり主人から口唇愛撫をされて身をよじる。」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>